

## アジア経済研究所図書館のコレクション (特集 アジア地域関連コレクション -- わが国主要図書館の所蔵資料から)

著者	狩野 修二, 伊藤 えりか, 石井 美千子, 東川 繁
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	138
ページ	4-7
発行年	2007-03
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00005275">http://hdl.handle.net/2344/00005275</a>

特集／アジア地域関連コレクション—わが国主要図書館の所蔵資料から

アジア経済研究所図書館のコレクション

狩野修二・伊藤えりか・石井美千子・東川 繁

●朝鮮半島

アジア経済研究所図書館には韓国・朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）刊行の所蔵資料が二万点を超えており、アジア・アフリカ諸語の資料としては中国語資料に次ぎ二番目に多い（二〇〇六年現在）。今回はこの中から特徴ある資料として社史・官報・新聞の三つを紹介したい。

・社史

韓国企業社史の収集は韓国の経済発展や企業研究のための資料として、研究者の協力のもと一九九〇年代半ばから収集が始められた。これら資料は現地においても一般の書店では販売されていないので、収集開始当初は現地の古本屋を通じ購入にあたった。現在では韓国・北朝鮮の書籍を扱う日本の専門書店を通じ積極的に収集を行っている。

当研究所の研究員の安倍誠氏によれば、「社史は一見すると無味乾燥なものが多いが、よく読むと企業の発展過程における興味深いエピソードを発見することができる。すでに企業内に当時を知る人がいないよう

な古い時代の話や、アクセスが困難な企業については、インタビュー調査にかわるものとして貴重な資料となりうるのである。社史によつては他では入手困難な財務データを収録していることも魅力の一つである」と、その有用性について述べている。

当図書館では現在約六〇〇冊の社史・団体史を所蔵しているが、各々の業種に従い分類されているため、配架場所が分散している。そのためこれら資料の一覧リストを作成・公開することは今後の課題である。

・官報

官報はその国の法令・告示・予算などを一般に公示する政府の機関紙として重要な資料である。当図書館では植民地解放後の新生大韓民国政府公報処発行の官報を原本で一九四八年九月一日第一号から一九七六年五月三十一日第七三三九号まで所蔵している。

この時期は朝鮮戦争の影響で資料の散逸が激しく、納本図書館である国立中央図書館にも原本の官報は完全には所蔵されていない。当図書館では、一九七〇年代前半に韓国の古本屋からこの資料を入手し、所蔵

している。

官報の刊行頻度は当初、週一、二回と不定期であり、記述は漢字とハングルの混交体であった。日付は最初の数字は大韓民国元号を使い、その後檀君紀元号の檀紀号を、一九六二年頃から西暦を使用している。

日本における原本の官報所蔵についてはアジア経済研究所編『朝鮮文雑誌・新聞総合目録』（一九八七年）によると、当研究所図書館のほか国立国会図書館の二館のみとなっている。また、大韓民国建国の年から朝鮮戦争終結の年（一九四八年九月から一九五三年二月）までについて、CD-ROM版がわずさわ書店より複製出版されたので、こちらを利用することもできる。

・新聞

当図書館で所蔵する朝鮮半島発行の新聞は、韓国の発行のものが二三紙、北朝鮮が四紙ある。これらのうち現在でも継続的に受け入れているものは、韓国では三大紙と呼ばれるうちの『朝鮮日報』と『東亜日報』の二紙と経済専門紙である『韓国経済』、『毎日経済新聞』のあわせて四紙。北朝鮮では政府の機関紙の『民主朝鮮』と朝鮮労働



書架いっぱいになんだ中国地方誌叢書

働党機関紙の『労働新聞』の二紙である。

当図書館では、継続受け入れしている新聞のほとんどを順次マイクロフィルム化している。これら六紙もすべてマイクロフィルム化されており、特に『朝鮮日報』と『東亜日報』は創刊年である一九二〇年から所蔵している。また『民主朝鮮』、『労働新聞』についても欠号が見られるが、いずれも一九四八年から所蔵している。

(かのう しゅうじ／アジア経済研究所  
図書館)

## ●中国・台湾

アジア図書館では約三万八〇〇〇冊の中国語図書を所蔵している(二〇〇六年三月現在)。アジア・アフリカ諸語の資料ではもつとも多い。その中から主なコレクションを紹介したい。

### ・中国の地方誌叢書

現在も増え続けている、大規模コレクションである。「地方誌」とは現行の行政区分ごとに、地域の概況を主題別に詳細に記した地誌のことである。行政単位が省や大都市など大きい場合は、さらに主題ごとに分冊して編集されている。中国社会科学院の中に、編集指導促進部とも言えるグループがあり、各行政単位に出版を促している。中国では既に二万冊余が刊行されている。新規出版のピークは過ぎたと考えられるが、まだ継続刊行中である。アジア図書館ではそのうち約三五〇〇冊を収集している。筆

者が中国社会科学院図書館を二〇〇四年秋に訪問した際は、省別にスラリと並んだ二万冊のコレクションが実に壮観であった。

出版された地方誌の全てが、大都市の書店や図書の貿易会社が集まるわけではないため、収集には工夫が必要である。

### ・中国の統計

一九八二年に『中国統計年鑑 一九八一年版』(中国統計出版社)で中国が初めて統計情報を公開して以来、統計書については網羅的収集を心がけてきた。年鑑類のほかに、人口センサス、農業センサス、工業センサスを収集している。中国では一九五三年、一九六四年に人口センサスが実施されているが、一九八二年に実施された第三次人口センサスで、初めて結果が公表された。当図書館では、当時二九あつた省・市・自治区のうち二四省の省別結果報告書を所蔵している。これは中国の人口問題を専門とする研究者から寄贈されたコピー版だが、WEBCAT上では当図書館しか所蔵していない貴重な資料である。

### ・台湾の出版物

台湾の出版物が少なくないことも、当図書館の中国語図書の特徴の一つである。近年は白書、産業年鑑、企業研究関連資料の継続受入れに力を入れている。

一九九〇年代末、それまで主要な産業年鑑類を出していた複数のシンクタンクが相次いで出版を中止し、新たに工業技術研究院が經濟部技術處の委託を受けて、編集・

出版を始めた。編集段階で産業分野を細かく分けているため、タイトル数が多く、内容も詳細である。当図書館では台湾の主要産業の年鑑を受入れている。

また、企業研究で欠かせない資料に、民間の調査機関・中華徵信所による『中華民大企業排名』、『中華民大企業研究』、『中華民大企業』(いずれも年刊)がある。いずれも企業の業績などの情報に詳しい。欠本が少ないので、遡って調べることが可能である。

事例として多いわけではないが、中国で発禁になった図書の繁体字版が台湾で出版されることがある。陳桂棟・春桃著『中国農民調査』(大地出版社、二〇〇五年)は最近の例である。かつて香港で出版されていたものが、香港の中国返還後、台湾で出版されるようになった。

### ・台湾の統計

台湾は、政府が統計調査を頻繁に行い、調査結果の出版にも力を入れてきた。当図書館では人口センサスは第一次(一九五六年実施)、農業センサスは一九五六年実施の抽出調査、工業センサスは第一次(一九五四年実施)からそれぞれ所蔵している。ほかに、年鑑・月刊誌が相当数出版されており、長期間、幅広く収集対象としてきた。

### ・華僑関連出版物

中国書の中には東南アジアの華僑による出版物が少なくない。収集の対象は一九五〇年代から一九六〇年代前半までに限られ

ていることから、特に計画的に収集したものでなく、華僑研究者からの寄贈資料と思われる。他にシンガポール、ベトナムやタイの華僑団体の出版物や、東南アジアの華僑史に関する図書も含まれている。

(いとう えりか/アジア経済研究所図書館)

## ●東南アジア

アジア図書館の東南アジア関係蔵書は大きく分けて、図書、統計資料、雑誌、新聞、官報、地図などがある。中でも統計資料、新聞、官報といった一次資料の蓄積は貴重なコレクションといえよう。統計資料や官報の所蔵状況はOPACで調べることができる。また、本誌第六三号では、統計資料と官報について国別に詳しく紹介している。新聞と地図については、当図書館ホームページで「地域別探す」という項目から「東南アジア」を開くと「新聞所蔵リスト」、「地図所蔵目録」がある。

多種多様な資料群の中から、ここでは最近利用者が増えている東南アジア諸語の図書と雑誌に焦点をあててみたい。

### ・東南アジア諸語資料―図書

当図書館では二〇〇五年度にインドネシア語、マレー語、ベトナム語図書のカード目録からデータベースへの遡及入力がほぼ終了し、タイ語図書目録のタイ文字による遡及入力は二〇〇七年度に終了する予定である。これにより東南アジア諸語蔵書がほ

ぼオンライン検索可能となる。主な言語の蔵書数はインドネシア語約三八〇〇冊、マレー語約六〇〇冊、ベトナム語約一九〇〇冊、タイ語約三八〇〇冊(ほかに英文併記の統計資料を数多く所蔵するが洋書扱いしているため、ここには含まない)。東南アジア諸語の図書については、研究所内外からよりいっそうの充実が求められており、収集体制の強化が課題となっている。

以下にタイ語とベトナム語図書から貴重と思われるものを選んでみた。

当図書館の創設当初、各国に赴いて基本的文献がまとめて購入された。その中には日本でも希少なコレクションがある。タイの法令集 *Prachum Khamai Pracham Sok* は、ラーマ一世が編纂した三印法典以降の法律を網羅した法令集で、当図書館では一九五六年まではほぼ全巻を所蔵している。

ベトナム語蔵書で特筆しておきたいのは、最近収集した各省別の共産党史(約二二〇冊)である。各省で出版される党史を網羅的に収集するのは容易ではないが、これは当研究所研究員の尽力により、国家図書館の重複図書を古書商を通して入手した貴重なコレクションである。各省の共産党の動きを記録する資料だが、発行年の新しいものでは行政や経済状況などまで含む内容になっている。

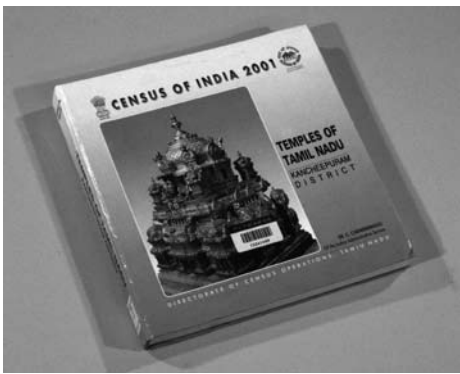
### ・東南アジア諸語資料―雑誌

当図書館は一九九三年に『東南アジア諸語逐次刊行物総合目録』を刊行した。これ

は、ビルマ語、タイ語、ベトナム語、マレー語、インドネシア語の新聞、雑誌、年報の日本の図書館における所蔵状況を調べたものである。その結果、日本では東南アジア諸語の雑誌を長期間にわたって継続的に収集・保存している図書館は少なく、アジア図書館における継続的収集の蓄積にあらためて気づかされた。

内容的には当図書館の所蔵雑誌は社会科学、特に(当然ながら)経済関係が多い。また、学術雑誌はもとより、総合週刊誌や経済誌、ビジネス誌などを早くから収集・保存してきた点も特色としてあげられよう。たとえば、インドネシア語の総合週刊誌 *Tempo* は一九六六年の創刊号から購読しており、途中数年の停刊期間をはさんで、現在まで四〇年にわたって継続している。経済誌 *Warta Ekonomi* もやはり創刊号(一九八九年)から所蔵する。タイ語のものでは、一九八六年からビジネス誌の月刊 *Phu Chakhan* を、一九九一年から総合週刊誌 *Matichon Susapda* を購読している。ミャンマーの雑誌は継続的な収集が困難なものが多かったなか、月刊の経済誌 *Dana Sibungye* は一九八九年から継続中である。これらの雑誌は現地のホットな情報を提供してくれるが、年月を経れば社会史や経済史の資料となりうるものである。

ちなみに雑誌も、停刊その他の理由により購読停止したものも含めて、OPACで検索可能である。また、現在継続中の雑誌



タミル・ナドゥ州のヒンドゥー寺院センサス

は上述のホームページ「東南アジア」の項の「継続雑誌」に国別のリストがある。

(いしい みちこ)アジア経済研究所図書館)

## ●南アジア

南アジア地域においては統計資料、特にセンサス資料を取り上げてみたい。当図書館は現在一四万冊強の統計資料を所蔵しているが、これは全蔵書数の約四分の一を占める。センサスはそのなかでも特に基礎的な資料である。センサスには人口センサス、農林水産業センサス、鉱工業センサス、商業センサス、事業所センサス等様々な種類がある。当図書館ではバングラデシュ、インド、モルジブ、ネパール、パキスタン、スリランカの六カ国についてセンサス資料を収集してきた。このなかでは世界第二の人口大国であるインドのセンサス資料の規模が大きく、当図書館でもまとまった資料群を形成している。そこで、ここではインドのセンサス資料を紹介してみたい。

### ・インドのセンサス

日常的な用法においてはセンサスといえは人口センサスを指す場合が多いといえる。しかし、インドのセンサス (*Census of India*) については単純に人口センサスと言い換えることはできないように思える。他の国々のセンサスと比較して、その調査対象が広汎だからである。人口センサスは基本的に人に関する様々な調査(人口規模、

出生・死亡率、民族、人口移動、家計、言語等)である。これに住居に関する調査が加わる場合が多い。これに対し、インドの人口センサスにはたとえばヒンドゥー寺院などの調査、刺繍などの手工芸品の調査、民族音楽の調査などが含まれている。これは各州単位の報告書として出されるものであるが、写真や図版が多用されており、読み物としても興味深い。

インドにおけるセンサスの歴史は古く、一八七二年の第一回から、中断されることなく一〇年おきに実施されている。当図書館では一九六一年の第一〇回実施分から本格的な資料収集を開始した。その後、一九七一年、一九八一年、一九九一年、二〇〇一年と実施されている。

### ・所蔵状況

当図書館におけるインドのセンサス資料の所蔵数は、二〇〇六年二月末時点で一九六一年が七四一冊、一九七一年が七三四冊、一九八一年が九一九冊、一九九一年が八四八冊、二〇〇一年が一九七九冊となっている。総計すると三四二冊となる。なお、インドに限らないが、一回のセンサスに係るすべての成果が公表されるまでには数年ないしはそれ以上の年月を要する。なかには三〇年近く経過してから出版された例もある。われわれは現在、二〇〇一年の第一四回実施分の成果を継続して収集しているところであり、今後総計で四〇〇〇冊を越えるものと思われる。なお、一九六一年以

降の五回分以外については、一九一一年、一九二一年、一九三一年、一九四一年の各回についてはそれぞれ数冊程度、一九五一年については少し多く一六六冊所蔵している。これらはたまたま入手する機会があった蔵書となったもので、言うまでもなく特にコレクションというほどのものではない。

### ・検索方法

これらのセンサス資料は当図書館OPACで検索することができる。一方、センサスのような複雑な体系の資料を探す場合、リストによる検索が便利ことがある。リストは一覧性にすぐれているからである。このことは統計資料全般に関しても当てはまることである。このような観点から、当研究所では統計資料の所蔵目録である『発展途上国の統計資料目録』を刊行してきた。先に述べたセンサス資料もこの目録に掲載されている。一九九五年版(第一六版)までは冊子体、一九九六年版はCD-ROMの形態である。本目録の刊行はこれをもって終了となったため、それ以降の情報提供はOPACで行っている。しかし、これを補足する形で、図書館サイト上の「リストで検索する」のコーナーにセンサスのリストを掲載している。一九九八年以前に受入れた主なセンサスリストを刊行国別・主題別に一覧できるので、OPACと合わせてご利用いただければ幸いである。

(ひがしかわ しげる)アジア経済研究所図書館)